

子どもに語る前に  
大人のための  
「性教育」



小学校教員

岡崎勝

社会学者

宮台真司



〈おそい・はやい・ひくい・たかい〉を編むにあたって

お腹に子どもを宿したとき、「ああ、うれしいなあ」というだけで親として十分なのに、昨今は「育成プログラム」や「勉強ができない」「人とのつきあい方がヘタ」など、子育てをする親や学校で仕事をする教員を不安にさせている。

「通っていれば、それなりに大人になっていくはず」だった学校でも、「個性を大切に」といいながら、実態は、大人の都合でつくったものさしで子どもを「分けて、ならべて、ばらばら」にしていないか。「個性」ってのは、つくられた枠からはみだすことだ。その「はみだし」を先生も親もクラスの子どもも、認めあいながら、調整し、折りあい、ときに見逃し、助けあう。それでこそ、みんなが一人前になるはずなのだ。

それから、家庭は安心して寝起きできる場、地域は子どもたちの遊ぶ元気な声を聞ける場にしたい。野山や路地裏の暮らしや自然は、子育てを支えてくれることにも思いいたりたい。知らず知らず、いま大人たちは、子どもが子どもでいられる空間や時間をますます狭く窮屈にしてしまっているからだ。そこには、「安全」「保護」「指導」という「配慮」がある。でも、この「配慮」が続けば、子どもは死に体となって「生きる意欲」と「生きる意味」をどんどん減じていってしまうことになるだろう。

そんなことを思いながら、〈お・は〉は、これからも、つらいときや出口が見えないときにみなさんとはげましあい、ほんとうに役立つ「指針」「原則」「経験」「知識」を提供したい。ときには「常識」や「力を持つ者」への疑いや抗議、異議を折りこみながら。

それから、平和は「世界」「国家」より、「未来を生きる子ども」にこそ必要不可欠。それは、〈お・は〉の深い根っこに宿った祈念でもある。

〈お・は〉編集人／小学校教員 岡崎 勝

03

〈おそい・はやい・ひくい・たかい〉を編むにあたって

岡崎勝 〈お・は〉編集人／小学校教員

子どもに語る前に

## 大人のための「性教育」

岡崎勝 小学校教員

宮台真司 社会学者

## 1 時間目 そもそも「性教育」って、なんですか？

12

学校の「性教育」に期待できるか？

三つの柱は「身体の仕組み」「人権教育」「性愛」／親の関心が高いのは「性犯罪・性暴力」／「性愛」の経験値が低い、教員や親たち

17

教員にも親にも「性教育」の資格はない。その理由は……？

一九八〇年代、「新住民化」で変わった生活環境／公園で焚き火ができた時代／昔の子どもたちが外遊びで学んだこと／「身体でつながる感覚」が生まれるとき／「性交」にも必要な「コール&レスポンス」の態勢／「セックスは作業」となった現在

28

性的退却が進んだいま、失われているのは？

「性の過剰」さがあったころ／先輩や同級生、変なおじさんとの関係のなかで／親や教員は絶対に教えられないこと

33 「性教育」では得られないものは？

学校で「性」を学ぶことが退却につながる？／大切なのは「知識」よりも「動機づけ」／ポジティブな「動機づけ」が得られるかどうか

## 2時間目 「性」とは、なんだろう？ 「愛」とは、なんだろう？

38 「性愛」の劣化を防ぐことはできるのか？

親が「性」を教えようとすることの悪循環／親は「愛」を子どもに学ばせる存在／「社会」に適應すると「性愛」は劣化する／「性愛」「友愛」に必要な「贈与」の構え

44 親もダメ、教員もダメ。子どもたちを導くことができるのは？

トラブルやリスクを避けたい大人たち／日本の親はもともと子育てのノウハウを知らない／「言葉・法・損得の外への開かれ」を促すには／「同じ世界を生きている」と思える条件／「コンテンツ教育」と「パントマイム教育」／体験を伝える「旅芸人方式」で／「性」と「愛」を伝えるときには／ワークショップの入口が「性」であるべき理由

56 「性」に関して、法や条例は有効？

「性」問題に対する厳罰主義／援交ブームから起こった条例制定／かつて当たり前だった教員と生徒の交際／いまの民主制で解決できないのは／新住民が民主主義で地域を壊す／「友愛」と「性愛」を欠いた尊厳はない／五〇年間の長い「空っぽ」／「社会」の代わりをする「世間」が消えた／法律や条例を変えても日本はダメ／「友愛」と「性愛」の劣化を「性愛」から切り開く／「性愛」の能力と関係する「友愛」と「公共的関心」

69 「危険」を子どもに、どう知らせる？

子どもに疑うことを教えるのが「性教育」？／「性愛」の経験は知識では補えない

74 「性愛ワークショップ」本当に学ぶべき、その中身は？

セックスを通じて「絆をつくる」／「アメンバーになる」ことで「愛」を育む／性交の「アフオーダンス」と日常の「ミーシス」／「愛の意味論」を理解する／「損得を超える構え」の入口は損得／〈前半プロセス〉での勘違い／「社交術」の本質とはなにか／一喜一憂からの解放としての「社交術」／歩留まり的な構えとの違い／〈前半プロセス〉を支えるオーネステイ／〈前半プロセス〉と〈後半プロセス〉のつながり／「性交」の中身に踏み込まずに語れること／相手の目を見る、相手の手を握る／田中浜の「場踊り」を導きの糸にする／「雰囲気」にのみまれることとの区別／「育ちの悪い大学生」にどう働きかけるか／決まりを破るだけに入れる「同じ世界」

101 「性の多様性」を、どう捉える？

学校では「認めよう」という流れはあるものの／性的な対象が絞り込まれていない思春期のころ／三人に一人がゲイ、背景を理解する／自分のなかにいろいろな人がいるという感覚

### 3 時間目 「幸せ」な大人になるには、どうしたらいいですか？

108 「リスク管理」は大事ではない？

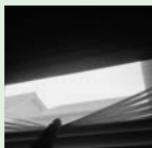
枠の外に出てしまう怖さ／学校の外で得られるドキドキする体験／共犯関係から始まること／不幸や悲しみなしに「愛」は得られない

113 「愛」を、どう伝えるか？

予定調和の「性愛」はありえない／体験教育に使える韓国ドラマ／「愛」は社会のカテゴリーを超える

117 「責任」を、どう考えるか？

道徳教育に用いるべき一九六〇年代作品／「自己決定」できず、「自己責任」が推奨される日本／八〇年代以降当



122

大人が「覚悟」すべきことは？

たり前になった「安心・安全」への要求

127

課外授業 親の私たちに、教えて宮台さん！

失敗を恐れる子どもたち／教員・親に必要なのは罰せられてもいいという構え／子どもにとって有効なことをやりつつけるには／学校に期待しない、そこから始める

140 135

授業のあとで

「性愛」の「魅力・誘惑」を大切にすることで、人は一人前になる

岡崎勝 小学校教員

「性教育」ならぬ「性愛教育」が不可欠な理由 宮台真司 社会学者

Oha通信

150

不登校のあとの暮らし方——「働く」までのまわり道④

外に出るきっかけ

野田彩花 フリーライター

159

うちのツレはカナリア——「空気」に反応する家族との暮らし④

悩ましい「香害」への理解

三島亜紀子 論文漫画家



165

アニメをこんなふうに見てみると②②

『ラーヤと龍の王国』が描く「相手を信じる力」とは

村瀬学 児童文化研究者

171

〈お・は〉編集人の学校再生提案④

教員の多忙さと「快感の原理」

岡崎勝 小学校教員

次号予告

創刊のことは

編集後記

「ホームページ会員」3つの特典

「アビール」原発のない日本を

〈ち・お〉&〈お・は〉を読む会リスト

〈お・は〉バックナンバー常備店

ジャパンマシニスト社の本

2022年〈ち・お〉〈お・は〉定期購読者募集

2022年〈ち・お〉〈お・は〉定期購読者への頼れる特典！

〈お・は〉編集人・編集協力人

インフォメーション ジャパンマシニスト各種お問い合わせ先

176 177 178 179 180 182 184 186 187 188 190 192

子どもに語る前に  
大人のための  
「性教育」

宮台真司 みやだい・しんじ

1959年生まれ。社会学者。  
映画批評家。東京都立大学教授。



小学6年生の修学旅行にて。

岡崎 勝 おかざき・まさる

1952年生まれ。小学校教員。  
〈お・は〉編集人。〈ち・お〉編集協力人。  
一般社団法人「アーレの樹」理事。



5歳のころ、名古屋の港にて。

子どもに「性」や「愛」を、どう伝えるか？

学校の「性教育」では？

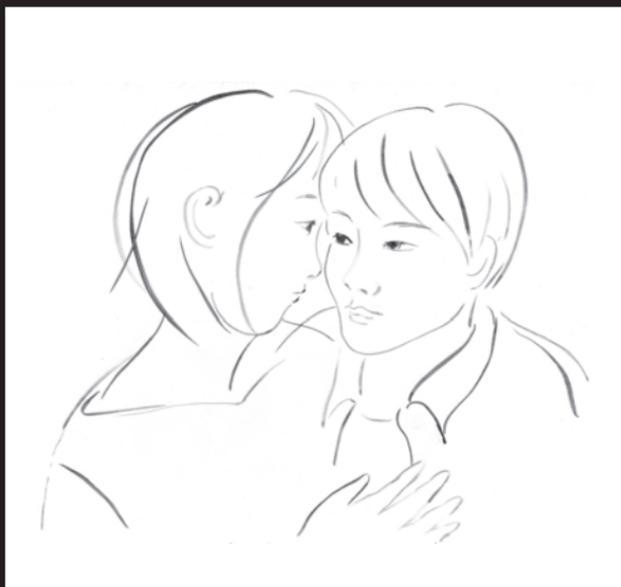
親ができることは？？

〈お・は〉編集人・小学校教員の岡崎勝が聞き手となり、  
「ウンコのおじさん」こと社会学者・宮台真司が、  
親や教員である大人に向けて白熱の授業を展開します。

\*この原稿は、二〇二一年一〇月三〇日に開催したオンライン講座「みやだいとおかぎ  
きが大人の性教育」の構成をもとに、大幅な加筆・修正を行いました。

# 1

時間目



そもそも  
「性教育」って、  
なんですか？

## 学校の「性教育」に期待できるか？

### 三つの柱は「身体の仕組み」「人権教育」「性愛」

岡崎 日本の学校の「性教育」について簡単に説明します。

大きく三つあります。

一つ目は身体の生理的な仕組みについてです。月経はもちろん、ペニスはどうなっているか、ヴァギナはどうなっているか。卵子に精子が侵入して受精卵になり、細胞分裂して成長する。赤ちゃんは胎盤で育つ、等々。理科・生物学的な話が中心です。学習指導要領には、小学校では五年生の理科で「人の受精に至る経過は取り扱わないものとする」、そして中学校では一年生の保健体育科で「妊娠の経過は取り扱わないものとする」と明記され、「性交については教えるな」と暗にいわれているわけです。そこをどうにか

乗り越えようと、養護教員や助産師が中心になって教えています。

それから、二つ目に「人権教育」としての「性教育」です。性犯罪・性暴力に直結しないよう子どもたちを守っていかうと、水着でかくれている部分と口をプライベートゾーンと名づけ、簡単に人に触らせない、見せないという習慣形成を目指して学習するものです。

三つ目は「性愛」についてです。ボクは子どもに「性愛」を教えることは重要なことだと思っています。たとえば、子どもが「赤ちゃんは、どうやってできるのか？」というときに、「愛し合う男と女が身体を重ねて性交する」というような話は絵本などでも描かれています。しかし「愛し合う男と女」という言い方は、たしかにそうかもしれないけど、子どもが簡単に理解できるものではない。ましてや小学生は年齢の幅も広く、生活経験の差も大きいですから。慎重さも必要でしょう。

子どもが「好きだったら、セックスしていいんですか？」と聞いてきたときに、教員の答え方としては、法律や経済力といった話になって、「性愛」については避けようとするのがほとんどだと思います。つまり「結婚すれば子どもができる」ということのうち、「結婚すれば、子どもをつくって育ててもいいんだよ」という安心・安全な理屈だけがデフォルトになっている。

ボク自身はこの三つのことを、子どもたちと関わりながら話してはいますが、「性愛」が「性教育」となじまない、なにかすっきりしない。

そもそも「性愛」は、学校で教育できるのか？ とかなり強く思いますし、一方で、知らん顔もまずいだらうと直感的に思うのです。

### 親の関心が高いのは「性犯罪・性暴力」

現在、「性教育」に対して親の関心が高いのは、性犯罪・性暴力の回避のためです。加害者・被害者になっては困る。だから子どもにも知識と回避の方法を教えないといけない。このことが大きなモチベーションになり、「性教育」の流れになっているとボクは考えています。

この加害者・被害者というのは、「性」の防犯的・人権的な問題だけでなく、本来「性愛」の問題だとボクは思っています。プライベートゾーンを守れば性被害は免れるかもしれないが、「性愛」の問題と課題は据え置かれていると思うのです。

親の「性教育」のニーズは「防犯」でも、性犯罪も本質は「性愛」の問題にあるのではないかとボクは思うので、本日は宮台さんに、親がどんな立ち位置で「性愛」を考え

ていけばいいのか、ぜひ伺いたいと思います。

### 「性愛」の経験値が低い、教員や親たち

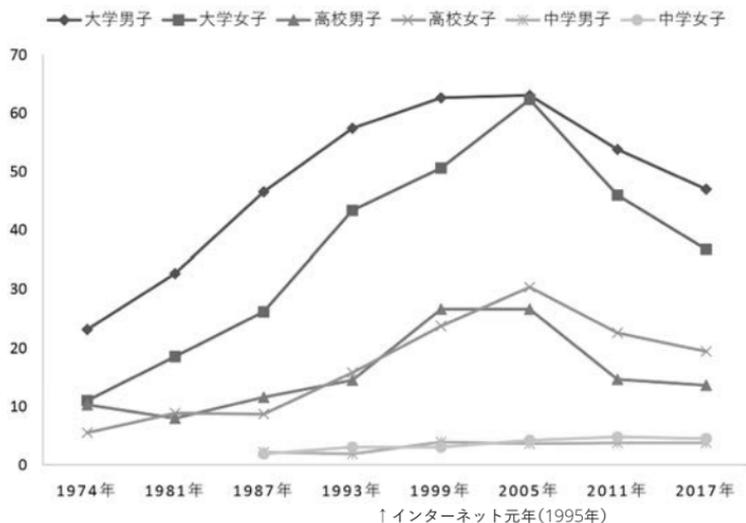
宮台 ぼくは三〇年以上前から、学校の「性教育」に期待できないうってききました。国際的な水準の「性教育」を担当するには、教員の「性愛」の経験値が低すぎるからです。その意味で、能力的に教える資格をもたないのです。だから学校では「生物学」だけ教えていけばいいでしょう。

フランスやほかの国々では、「性愛」の経験値が高い専門家が、旅芸人のように学校をまわるやり方をしています。いまはリモートで動画を見て、「性」や「愛」について学んでいます。実は「性教育」というより「性愛教育」が国際的な水準なのです。「愛」は「生物学」では教えられません。

残念なことです。日本会議系からの圧力うんぬんとは関係なく、日本の学校のルートを使った「性愛教育」には今後も期待できないでしょう。しかし、フランスのように学校のルートを使った「旅芸人方式」でなくても、なんらかの「性愛教育」のチャンネルを開くことは可能です。今日はそのこともお話しします。

図表1 若者世代の性体験率の急減

大学・高校男子のピークは2000年ごろ。大学女子のピークは2005年ごろ。  
ピーク時に比べて2017年には、大学女子は半減、高校男子も半減。



出典 日本性教育協会「青少年の性行動全国調査」(6年毎リサーチ)

とはいえ、親が子どもに「性愛教育」ができるかという点で、統計を示しますが、二〇〇〇年ごろをピークに性的退却が進んでいて、高校生も大学生も性体験率がほぼ半減しました(図表1)。すでに性的退却が始まっていたゼロ年代前半に二〇代の人が、いまは子どもをもち、「性愛教育」の当事者になりうる状況なのです。

ところが、二〇年余り前からの性的退却の時代以降に親になった世代は、平均的に申し上げて「性愛教育」の資格はないと断言できます。なぜかという点、経験値がむしろ下がってしまっていて、「性愛教育」の能力がないからです。「性愛教育」に必要なものは、なにをおいても経験値になります。

教員にも親にも「性教育」の資格はない。

その理由は……？

### 一九八〇年代、「新住民化」で変わった生活環境

岡崎 もともと、セックス、「性交」には「生殖」と「快楽」の二つの側面があるわけです。ボクは「性愛」について、「快楽」とのつきあい方のほうは、いままでの学校には教える能力がないと思っています。本来、「性愛」は、「快楽」の活用問題と切り離して考えられないのです。もっといえば、どう妄想を抱えて社会のなかでまともに生きていくかという問題なのです。学校にはそれを教える能力がない、教育する資格がない……当たり前ですね。

でも、そうなってしまったのはなぜなのでしょう？ 「性」に対して考えてこなかった、体験が少なかったということもあるとは思いますが。

**宮台** まず、現場では「人権教育」が最大のネックです。「人権教育」は八〇年代の「新住民化」の帰結です。八〇年代には日本全国で同時に生活形式が変わりました。バブル景気で人口的流動性が高まり、単身赴任も増え、各地に「新住民」土地にゆかりのない人」が多数住むようになります。

その結果、一九八二年にワンルームマンションの建設ブームが起りましたが、同時に建設反対ブームにもなりました。「ゴミ出しのルールを守らない、自転車を乱雑に並べる、見知らぬ人が近隣をうろつく」といった理由で、全国各地で建設反対ブームが広がっていききました。

また、八〇年代半ばになると、土地にゆかりのない新住民をあてにしたコンビニエンスストアが爆発的に増えます。代わりに地元商店が寂れていきます。そうした流れで、旧住民同士も次第に疎遠になっていきます。そのことも含めて「新住民化」という言葉を使っています。

それに伴って、子どもの生活環境も大きく変わりました。『ちびまる子ちゃん』の

さくらもこは、ぼくより一六歳下ですが、彼女の作品にもそのことが描かれています。家は和風軸組建築で、小さくても庭がありました。ツー・バイ・フォーで庭のない家が出てくるのは、日米構造協議後の九〇年代からです。

ぼくや岡崎さんが小さいころ、よその家でごはんを食べたり、家でよその子とごはんを食べたりするのが当たり前でした。日が暮れてもドッジボールやゴム跳びをやっていた、お母さんやきょうだいなど家の人が「ごはんだから帰りなさい」と呼びにきて、おひらきになるのが日常でした。

男女に関係なく、花火の横打ちや焚き火もよくやりました。男の子はみんなで森や草むらに入って虫とりをしました。近くに川があれば泳いだし、笹舟を流したりもしました。いま申し上げたのは、すべてぼくや岡崎さんが経験してきたことばかりですが、親世代であるみなさんの多くはすでに、経験したことがないでしょう。

### 公園で焚き火ができた時代

焚き火は、当時すでに各地の火災予防条例で禁止されていました。でも、焚き火をやったからといって、通報する人は誰一人いませんでした。それが、九〇年代に入る

と直ちに通報されるようになりました。いまは、大きな私有地内か、宗教施設の敷地でしか、焚き火ができなくなりました。

ぼくは一九八七年に東大の助手になってから毎年、花見の準備役をやりました。よく使ったのが代々木公園でした。当時はまだ、場所取りをヤクザが仕切っていました。そこで花見をしていた人たちは、夜になると例外なく焚き火をしていました。ぼくたちのパーティも必ず焚き火をしました。

すると、パトロールカーに乗ったおまわりさんが公園内をまわってきて、「公園での焚き火は、条例によつて禁止されています」とアナウンスします。だからといって、焚き火をやめさせることはありませんでした。要は「気をつけてください」というアナウンスだったのですね。

ぼくは、座を盛り上げるためにオイルを使つて火をぼうぼう焚くのが好きでしたが、おまわりさんは「君、ちよつと火が大きすぎるなあ。もつと小さくしなさいよ」というだけでした。それが一九九二年までの状況です。九二年から、代々木公園での焚き火はできなくなりました。

## 昔の子どもたちが外遊びで学んだこと

外遊びの経験や、火を囲む経験は、「性愛」の能力に直結します。生き物とりは遅くともオウストラロピテクス(猿人)以来の集団的営みで、火をみんなで囲む営みはホモ・エレクトゥス(原人)以来の集団的営みなので、身体性がゲノム(遺伝情報の全体・総体)に刻まれています。

外遊びについては、「アフォードダンス」の概念が役立ちます。大人たちは子どもに「よく考えて選択しなさい」といいますが、人間の行動の基本はもともと、「選択の主体性」  
|| 「能動性」ではなく、「非選択の自動性」  
|| 「中動性」。コールされて思わずレスポンスする構えです。

山道を歩いて疲れてきて、岩に腰掛けたとします。古い心理学では「疲れたので、座れる場所を探して、ちょうどいい岩を選んで座った」と記述します。いまの生態心理学は「ある岩が腰掛けると呼び掛けてきて(アフォードしてきて)、思わず座った」という記述になります。

武術やスポーツを深くやっていた人はご存知ですが、選択の主体性||能動性ではまったく話になりません。非選択の自動性||中動性があってはじめて試合に勝つことが

できます。これを、身体化された技術という意味で「技能」と呼ぶこともありませんが、技能の本質は、この中動性なのです。

なお中動性は言語学者エミール・バンヴェニストの概念です。彼によれば能動態と受動態は互いに他に文法的に変形できるので本質的には同じで、能動態&受動態を文法的に変形しても同一にならない中動態だけが、本質的に違うものだとします。日本語では、「見る・見られる」に対する「見える」ですね。

さて、ここに複数の人がいるとしましょう。音や光や匂いや互いの身体を含めた「事物」の総体に、複数の人たちが同じようにアフォードされている場合、その人たちは、自分たちが「同じ世界」を生きていると感じます。「同じゾーン」に入った、「同じフロー」に乗った、と表現しても構いません。

昔の子どもたちが外遊びで学べたのは、実は「同じ世界」を生きる体験の豊かさなのです。楽しく外遊びができるとは、「同じ世界」を生きる、「同じゾーン」に入る、「同じフロー」に乗る営みを、「享楽」として体験できる、ということなのです。後で話しますが、この体験の輝きが「性愛」にとって決定的な意味をもちます。

ちなみに「享楽」という概念は、快楽という概念から区別された、フロイト派のジャック・ラカンの言葉です。快楽がほかの快楽と比べられる相対的なものであるのに

楽しく外遊びができるのは、「同じ世界」を生きる、

「同じゾーン」に入る、

「同じフロア」に乗る営みを、

「享楽」として体験できる、ということ。

対し、「享楽」はほかと比べ

られない絶対的なものである

ことを表します。加えて「快

楽は人それぞれだけど、享楽

は(ゲノム的に)万人に共通だ」

という含意もあります。

### 「身体でつながる感覚」が生まれるとき

お話したように、ぼくたちが火を使うようになって一八〇万年です。ホモ・エレクトゥスという人類の祖先から始まりました。進化生物学によれば、火を囲むとフレンドリーになるようゲノムにプログラムされた身体が、集団生存確率を上げることで、生き残ってきたのです。

ぼくも、大学生までを相手としたキャンプ実践をします。社交的か否かという性格に関係なく、夜に焚き火を囲むと、「誰もが」気持ちいが和らぎます。本音トークが始まり、悩みや家族の話が平気でしゃべれる状態になります。寝袋を持ってきて「ここ

で寝ていいですか？」という子さえ出てきます。

いまは人為的にそういう場をファシリテートしないといけません、ぼくや岡崎さんが子どものころは、そういう機会が当たり前のようにはありました。「同じ世界」「同じゾーン」「同じフロー」といいましたが、「ほかの人と身体でつながる感覚」と言い換えることもできます。

先ほど話した「アフオーダンス」は、知覚心理学者ジェームズ・J・ギブソンが創案した生態心理学の概念で、「モノ」や「身体」にコールされて思わずレスポンスする「コール&レスポンス」の態勢のことです。これは先ほどお話ししたように、能動的な選択ではなく、中動的な自動性です。

### 「性交」にも必要な「コール&レスポンス」の態勢

実は、適切な「性交」においても、同じことが生じているのです。二〇年余り前から高校・大学生の性体験率が激減した事実を話しました（二六ページ、図表1参照）。このころから、男にとって「性交」は、「非選択の中動性」から「選択という能動性」に成り下がりました。つまり、手順の意識的遂行という「主体による選択」になりま

した。

たとえば、多くの男子が、アダルト映像を見て達成課題を決め、どうすればそこにもちこめるかという「選択」を考えるようになりました。その結果、男が自分のフィルターバブルのなかに入ってしまった、相手と一つの風船のなかで一緒にいる感じになれなくなりました。とてつもない鈍感さに陥ったということですね。

実際に「性交」に必要なのは、相手の表情・体温・声・動きや震えに対して、思わず自動的に反応できる構えです。つまり、「コール&レスポンス」からなる中動態の態勢です。それがなければ、「同じ世界」「同じゾーン」「同じフロー」「心身がつながった感覚」から見放されるしかありません。

ワークシヨップで使う言葉でいえば、〈コントロール〉があっても、〈フェュージョン〉がなくなります。「着衣などへのフェチ」があっても、「相手の感覚へのダイヴ」がなくなります。こうして、「相手と一つのアメーバになること」がありえなくなります。だから、「性交」に伴う「享楽」がなくなるのですね。